山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第11号（2000.3）

オープンスクールでの授業実践

ースクールカウンセラーとのコンサルテーションー

三原　典子*・荘司　泰弘**

A study on Learning practice with Open School
−The consultation with school-counselor−

Noriko MIHARA* and Yasuhiro SHOJI**

キーワード：オープンスクール　ティームティーチング　授業実践　幼小連携
スクールカウンセラー

1．はじめに

私は、人事異動により９年振りに転勤をした。琴芝小学校についての知識は、校舎の改築によるオープンスペースを有する小学校という位しか、恥ずかしながら私にはなかった。私の担当学年は２年生となった。久しぶりの２年生担任ということもあり、私は内心うれしかった。ところが、K君という手の掛かる子どもがいるという話を同僚から私は聞いた。どんな感じの子どもなのだろうか、また、具体的にどう手が掛かるのかを聞き、私は「大変な子どもだからこそ担任をしたいなあ」と思いK君の担任となった。

2．K君の観察記録　（１学期）

K君は、気が向かないと給食当番の仕事や学習を全くしない。授業中に教室の徘徊もある。学習に関しては、特に漢字を書いたり作文を書いたりという文字を書くという作業に対して拒絶反応を示した。例えば文字を書くという作業の時には、K君はペットボトルに水を入れたものを持って遊んだり、椅子をロッキングチェアーのようにして遊んだり、自由帳に絵を描いて遊んだりしていた。また生活面でも、友達とのちょっとしたいさかいや友達のお金や学習用具を黙って取り、勝手に自分の物にしようとしたり、スーパーで万引きをしたり、車に向かって腕を出し車の運転を妨害してみたりしたこともあった。

新学期当初は、学級担任もクラスの友達も変わるということで緊張していたK君であったが、６月をすぎると次第に落ち着きがなくなってきた。落ち着きがなくなるとともに、授業中に教室から外へと抜け出す行動も見られるようになってきた。

私のクラスには、K君の他にも学習面で配慮を要する子どもや生活面で私の援助を必要とする子どもが多数いた。しかし、K君に振り回されていた私は、自分の目の届くところに気になる子ども達を置くということしかできなかった。そしてK君に対しても、どのように接していけばいいのかが全くわからないまま、自分の感情をぶつけることしかできず

*三原典子　宇部市立琴芝小学校教諭　　**荘司泰弘　山口大学教育学部

にいた。

1学期も終わりに近づいた頃、精神的に疲れ果てていた私は恩師にK君のことを相談してみた。すると恩師は私に「スクールカウンセラーに相談してごらん。」と助言してくださった。ちょうど私の勤務する琴芝小学校では今年度より常磐中学校を拠点とする拠点校方式による「スクールカウンセリング」(school counseling) が6月から始まったばかりであった。

「スクールカウンセリング」とは「学校において、学習面と適応面に焦点を当て、学校心理学、カウンセリング理論、臨床心理学などの心理学上の知見を生かしながら行われる心理・教育的援助のこと」[1]である。私はカウンセリングを受けたことがなかったが、藁をもすがる思いで「スクールカウンセリング」を受けてみることにした。夏休み3日前のことである。

3．スクールカウンセラーからの最初の指示

7／16（木）スクールカウンセラーのN先生のカウンセリングを受けた。日頃のうっとした思いが一気に出てきたようで思わずカウンセリング中に涙が出てしまった。先生が私の気持ちを受容してくださりさらに共感的理解をしてくださったことがうれしかった。

7／23（木）何か吹っ切れた感じがした。今回のカウンセリング後、私は心が解放されたような感じがした。

（指示）席替えの時には気になる子どもも分散して配置すること。風穴を作っておくこと。

8／6（木）カウンセリングの時間は短かったが、K君をどう援助していくかという内容の話が中心となり、私はとても疲れた。

（指示）K君に対して、ここまではがんばろうという枠を作ってあげることが大切。

4．K君の観察記録（2学期）

長い夏休みを終えて2学期がスタートした。9月の第一週はとても調子がよかったK君であった。しかし、次第にK君の調子は悪いサイクルで動くようになってきた。

9／7（月）体育の学習の時間になっても体操服に着替えようとしない。運動会のダンスの練習を2年生全員でやることになっていたが、前の友達をつっつくなどして並ばない。踊りの曲が流れるとそれなりに踊っていた。音楽の時間は、オープンスペースの所にある長机の上に寝ころぶ。国語の時間は、ワークシートによる学習であったが、全くしなかった。学習面だけでなく、生活面でも、給食当番の仕事はしない、食事中も立ち歩く、体操服に何とか着替えたものの洋服・上ぐつ・体操服を入れる袋・タオルすべて机の周りに置いてあるなど、私には耐えられなかった。

掃除中、K君は、また姿をくらました。どこへ行ったのかを探すため、私は教室・オープンスペース・通路・1年生の教室・廊下・保健室まで行った。しかし、K君はいなかった。私は教室へ戻る途中、K君の姿を水飲み場で見つけた。「のどが渇いたから水を飲んだ。」と答えるK君。あきれてしまった。教室に帰ってからも何もなかったかのようにふざけるK君をみていいかげんにしてほしいと私は思ってしまった。疲れた。

9／8（火）国語の時間：全く授業中、学習に取り組もうとしなかった。だが、席には着いていた。算数の時間：3けたのたし算の筆算の勉強。K君は教室中をフラフラ歩き回る。

よく見ると、教科書もノートも用意していなかった。そこで私は、教科書とノートを机の上に出すように指示をした。しかし自分からは出そうとしない。私は、他の子ども達のノートの採点をしていた。ふと見るとK君がいなくなっていた。実は友達のところでちょっかいを出したり鉛筆の芯を手で抜き取り友達にチクッと刺したりしているではないか。私が優しく言っても厳しく言ってもK君には伝わらない。

9／9（水）K君：解熱鎮痛剤を服用して登校。学校でも嘔吐。倦怠感を訴えるため保健室へ行く。家庭へ連絡後下校。ぜんそくの発作が出ているようである。母親に電話連絡をした時の情報で、K君はぜんそくの発作で寝られなかった日の翌日は、暴れるタイプだとのこと。

9／11（金）運動会の練習の時：帽子をかぶってくるように伝えたところ、運動場から教室へ取りに行くというのが面倒くさいK君は、あばれて取りに行こうとしなかった。しかし、暑さへの対策を考え何とか取りに行かせた。体育館での練習になったら、2階へ上がって遊ぶ。ダンスの途中で練習をしなくなった。

給食当番の仕事を相変わらずしない。さらに食事中自分が食べたミニトマトのへたを友達のお盆の上にのせたり熟し切ったミニトマトを友達のお盆の上にのせたりした。友達がK君にやめるように言い手を振ったとたん牛乳がこぼれた。しかしK君は全然自分が悪いことをしたという思いがない。私は、カウンセラーに電話をした。

カウンセラーの「僕から電話をかけようかと思ったけれど先生と話ができてよかった。」の一言が、私の気持ちをほぐしてくれたようだった。

（指示）エネルギーを消耗しないために、しからず、優しくも言わず、一言さりげなく言うように。今の状態では、しかったりさせようとしてもだめだから大目に見られることは何かを考えること。ぜんそくの発作の状況も時々把握すること。

私は、心のゆとりの必要性を痛感した。同時に、電話で助けていただいて涙が出そうなくらいうれしかった。

放課後、養護教諭にK君のことを話す。お互いに情報を送ることを約束した。具体的には下記の通りである。

・ぜんそくで体調の良くない時は来室しても良い。
・38度くらい発熱しても元気なほど熱には強い。
・教室へ帰りたくなさそうな時は、教室の近くまで養護教諭が連れていく。ぜんそくの状態もその都度必要に応じて知らせる。

9／17（木）スクールカウンセリングを受けた。K君の状態が不安定で週を増すごとに調子が悪くなることに対して、「私が悪いのではないだろうか、私の力量がないからだろうか？」と問う。するとカウンセラーは珍しく毅然とした態度で、「ここだけは認識して欲しい」「誰も悪くないと自己認識しないと前に一歩踏み出すことができない」と言われた。

（指示）

悪者捜しをしないように。

どういうことが許せるか、どこが許せるかというように大目に見られることをいくつか見つけること。

9／18（金）朝、K君は機嫌良く私にまとわりついてきた。「今日は調子がいいな」と内心期待して「先生が教室に行くまでにかばんをロッカーに入れておいてね」とさりげなく私は言った。「いけたぞ！」と思いながら職員室へ行く。しかし、教室へ戻ると全く変わ

らず。むしろ教科書・ノート・かばん・下敷き・筆箱すべて無造作に投げ落とされた感じ。正直なところ、ガクンと来た。授業中の徘徊がとても多かった。

5校時の音楽：鍵盤ハーモニカの練習の時、K君は列ごとの練習には何とか取り組もうとする。しかし、一斉の指導となるとチューブを持ち手悪さをする。私は他の子ども達を教えるのに必死となったため、「K君の好きなようにして」という思いであった。ふと見ると、K君が教室から出ている。多分オープンスペースにいるのだろうとわかったので、私はそのままにしておいた。帰りのあいさつの時、またいなくなった。私は「もう知らない」と思い日直の子ども達にあいさつをするように指示した。すると、あいさつの直前になってK君は戻ってきた。掃除中もどこへ行ったかわからない。ひたすら振り回される。

9／19（土）今日も1日好き放題にK君は過ごした。運動会の練習にも取り組まない。わざと寝ころんだり跳び箱の上にのったりする。先生方から「やるな」と言われることばかりするK君。連絡帳も開いて書こうとはせず、体操服の着替えもしようとしない。なのに、K君に対して何を大目に見ろとカウンセラーは言われるのだろう。何もできない。私がK君にできることは何なのか。下校の時刻になっても帰りの支度もしないで、また教室から出ていったK君、机の周りは学習用具が無造作にばらまかれている。戻ってきたK君に対して私はとうとう「いいかげんにして」と怒鳴ってしまった。と同時に自分が情けなくて、むなしくて涙が出そうになった。そして、涙をこらえながら私はカウンセラーに電話をしてしまった。

（指示）1人の担任の先生の持っているエネルギーを考えると、1人で頑張りすぎないことが大切。援助してもらうこと。今より一歩進めて行くための「ティームティーチング」(Team-Teaching）の形をとること。さらに緊急の場合にはカウンセラーも使って良い。

9／21（月）K君のお母さんに会う機会があったため、次のように話してみた。

＊養護教諭・担任とべたべたまとわりつくことが多いこと

＊お母さんに甘えたいのではないでしょうか

9／22（火）K君は2学期になって連絡帳を書かない。そこで、私はK君のそばに行き、K君の連絡帳を見せてもらった。連絡帳には、次のように書かれてあった。

＊明日はお休みなので、少し甘えさせてみようかなと思います。

＊学校から帰って本人と少し話をしました。

＊夜、博多にいるお父さんと少し話をさせました。

＊連絡帳を書いて帰らないのならば、友達のノートを見せてもらうか覚えて帰るかにするように言いました。

放課後、K君の1年生の時の担任の先生に1年生の時のことを聞く。

＊K君は給食当番でも温食係の仕事はする。でも、牛乳が重たいからと言って、牛乳係はしなかった。というように好きな仕事はするけれど嫌いな仕事はしなかった。

＊3学期ぐらいかなーやっと少し落ち着き始めたなというのは。でも、私も2回は泣いたよ。

私はまだ1回しか泣いていないから、まだいいほうかと思った。

9／25（金）K君は、今日初めてかばんを1校時が始まる前にロッカーに入れることができた。図工の学習の時も、途中、席を立つものの何とか授業中もつことができた。運動会の練習もダンスの練習の途中で座り込んでしまったものの、何とか頑張った。給食当番の仕事も3日続けてすることができた。連絡帳も遅くなったけど書いて私に出すことができ

た。私はK君の頭をなでてやるとともにK君の連絡帳に誉め言葉を書いた。どうか1日でも長く良い状態が続きますようにと願う私であった。
9／29（火）運動会の振替休日後の登校となった今日のK君の様子は以下の通りである。漢字の練習をするように指示をしても、K君はじゆうノートで遊ぶ。(私がK君のメニューを用意していなかったからであろう）テストの時間は自分の名字をやっと書くだけで、全く取り組まなかった。図工の時間は読書感想画を描くということだったので、比較的取り組みやすかったようであった。給食時間の様子は、絵の具の片づけもせず、エプロンにも着替えず、とうとう給食当番の仕事をしなかった。さらに、食事中も立って牛乳を飲んだり、友達のグループのところで飲んだりまた気が向けば自分の席に着いて飲んだりという感じであった。
9／30（水）給食時間、食べては壁により掛かり、また食べる。給食後トイレに言った子どもが「先生、トイレにテストが落ちている」と行って来た。見ると、なんとK君は昨日のテストを家に持って帰らずに便器に捨てていたのであった。まわりの子ども達が騒いでいるうちに私も知らないうちに、K君はスッと姿をくらました。さがしてもさがしてもK君の姿が見つからない。私は、管理職・専科の先生に事情を話して一緒にさがしてもらうことにした。校舎内をさがしてもいない。とうとう全校体制でさがすことになった。結局、焼却場近くの段ボール置き場の段ボールの所にK君は隠れていた。K君を捜すことで職員会議は30分開始が遅れたが、先生方は嫌な顔をひとつされなかった。
K君は、昨日トイレに落としたテストが見つかったから逃げたという。教室に戻り1対1で話をする。私のことを心配してS先生が来てくださり、私と一緒にK君の話をそばで聞いてくれた。悪かったことは何かと聞くと「テストを捨てたこと」とK君は答えた。テストを捨てたことも悪いけれど、自分が勝手に隠れて、全校の先生に迷惑をかけたことが一番いけないことだと言う。「一つしかない命がなくなったらどうしようかと心配したのよ」と話すとK君は涙を流し始めた。
しかし、次の日のお母さんからの連絡帳で、「帰宅後本人はケロッとしておりその顔を見てまた腹が立ち怒りました」の文を見て私もため息が出た。
10／1（木）カウンセラーが授業参観に来られた。

5校時：音楽　「虫の声」
　　ねらい　みんなが鍵盤ハーモニカを使って自分の吹いてみたいと思うコースを自分で選択し、吹けるようになる。
1．音あて遊び
2．コース説明
　＊のびたコース　　ソの音のみ吹く
　＊ドラえもんコース　　教科書と同じメロディー
　＊しずかちゃんコース　3度あるいは5度で重音となるように私が作ったメロディー
3．コースを選ぶ
4．コースごとに分かれて練習する
5．全体で音あわせのリハーサルをする
6．みんなで音あわせをする
　　評価　それぞれのコースを自分で選ぶことができたか
　　楽しく吹くことができたか　（K君　がんばることができたか）

授業後の感想として、カウンセラーは次のように述べられた。
＊20分ぐらいではあったが、K君が授業に参加したことはよかった。
＊ソの字の弁別の時26個中25個までさがしたがあと1個がなかなかさがせなかったけれど、最後までさせたことは良かった。(私はK君にさせることが大切と思ってさせた)
＊音あてあそびはK君にとってモデルが3人いて自分が指名される所にいるということで枠ができて良かった。
＊コース別の練習に入ってからざわつき、行動がハイになった。音・ざわついた音・練習の音という刺激の情報処理ができないためによる行動が見られた。
＊今までの記録で見たK君の中では一番良い状態であったと思う。

10月の声を聞いても、K君はなかなか落ち着かない。しかし、授業参観をカウンセラーにしていただいて、K君には静かであるということが大切なポイントであることがわかり、私は毎日、本の読み聞かせをすることにした。すると、K君は椅子から離れることなくじっと聞いている。話の内容に誰よりも早く反応する。K君が静かにすることにより、クラス全体にも静けさが保たれるといった効果が本の読み聞かせにはあることもわかった。また、校長の働きかけで、K君のお母さんのカウンセリングも始まることになった。(お母さんからの電話による) K君は喘息の症状が出ているので通院も続くことになっていたため、私はK君のお母さんに手紙を書いた。すると、次の日、連絡帳に「お手紙ありがとうございました。いろいろ気をつかっていただきうれしいです。」と返事が来た。今まで、謝罪の言葉はあっても、「うれしいです」という内容の手紙など1度ももらったことがなかっただけに、私もうれしかった。

相変わらずK君の気分による行動は続いた。たとえば、授業中にフラフラとオープンスペースを歩いていてビニール袋を見つけたとたん、ふくらませて「パーン」と音をたてたり、ロッカーをたいこのようにたたいてみたり友達の消しゴムをとったりといった具合である。

10／9（金）国語の読みとりテストと聞き取りテストを実施した。K君は、読みとりテスト、聞き取りテスト、共に100点を取った。実はテストに取り組み始めたときに、私はK君の耳元で内緒話のようにささやいたのである。「名前、漢字で書いてよ」するとK君は書いていたひらがなを消し漢字にする。「今日は全部がんばれそう？先生、Tちゃん（K君の名前である）のこと見ているからね。できそう？」「うん」「じゃ、先生あっち行くよ」といった具合に優しく接していたのであった。抱っこに近い状態で耳元にささやいたのである。しばらくすると、K君が私の所に来た。「先生できたよ」「おりこうさんやったね」「先生、何しようか」「なにしたい？」「じゆうちょう」「じゃあ、やってみたら」と、私もとても穏やかに話すことができた。

給食時間に、前、取り組もうとしなかった算数テストをさせた。すると数学的な考え方が必要なテストであったが、あっという間にやって100点を取った。私はK君を誉めると同時にＧｕｔ！と書いてやった。しかし、下校後、K君の机の下にテストが2枚ぐちゃぐちゃになったまま忘れられていた。

まだまだ不安定な状態で日々が過ぎていった。私は、私のカウンセラーが欲しいと思うようになってきた。何をしてもどう頑張ってもK君に伝わらないことに対して空しさがあり、エネルギーを吸い取られてばかりで疲れ果てた毎日を私は過ごしていた。

10／15（木）今日からK君のお母さんのカウンセリングが始まった。月に2回のペースで

カウンセリングが続けられるとのことであった。初回の面接で、「いい感じがつかめそうだ」とカウンセラーは言われた。K君の面接は、11月から始まるとのことであった。

相変わらずのK君の態度に私は疲れ果ててしまうという毎日であった。疲れが顕著に現れたのが、K君の観察記録であった。「空しい・手がつけられない・優しく言ってもしかってもK君に何も届いていないような気がする・記録を書く意欲がない・ガツンと一言言ってやりたい・もし、ガラスがあれば蹴ってめちゃめちゃに粉々にしたい」等の 言葉が頻繁に出てくるようになったのである。つまり、私は自分自身の像としてnegativeな自分しか見ることができなくなってしまったのである。

ある日、K君のお母さんが来校され、私は次のような情報を得た。

＊K君の弟が生まれる時、K君の名前から一字使いたかったが、親戚の人たちからK君のような子どもになってもらっては困ると言われたこと

＊お母さんは実母から「Tを置いて弟と家出しなさい。そうするとTも自分で頑張らなければいけないという気持ちになるから」と言われたこと

私は以上のことからK君のお母さん自身も頑張らなければならない点はあるかもしれないが、お母さん自身もK君のことで悩み苦しみどうしたらいいのかわからなくなってしまっているのではないかと思うようになったきた。また、日々のK君のお母さんの様子から考えるに、喜怒哀楽の感情の中で喜・楽の感情の表出が少ないような気がする。喜・楽の感情の表出が少ないだけ疲れていたり腹が立っていたりしているのではないか。私も母親だから、K君のお母さんの気持ちは痛いほどよくわかる。そして、同じ母親として共感できるところは共感したいと思うようになってきた。

K君の相変わらずの気分による行動は続いた。しかし、10月の最後の日、K君は10月になって初めて連絡帳に連絡事項を書いて私に提出した。また、算数テスト「三角形と四角形」にも取り組んだ。（表裏共に満点）私はK君の様子に希望を持ち、やっていけるのではないかと思うようになった。しかし11月になって、K君は公共の建物のブロック塀43枚分に落書きをした。私は生徒指導の主任と一緒に落書きを消すために、バケツ・たわし・ぞうきんを持って行ったが、あまりの落書きの多さに、とうとうK君のお母さんに連絡をして落書きをK君と一緒に消してくださいと言った。翌日K君は友達のお金を盗んだ。続けてのK君の行動に私は気になったもののK君は悪いと思ってやった行動ではなくただ発作的にやってしまったのではないかと思った。でも私はK君に積極的に関われなかった。

ある日曜日、何故か私はK君のことが頭から離れなかった。K君の担任として残された日々をどう過ごしたらいいのだろう。私は修了式の日の自分の姿を思い浮かべながらチャート図を書いてみた。私がK君に対してpositiveに関わった場合とnegativeに関わった場合である。積極的に関わることができた場合は「がんばってよかったな」と自分に対して思うだろう。またK君に対しても「かわいい子どもだった」と思えるだろう。さらに私はカウンセリングノートとして今までノートに書き留めておいたものを振り返ってみた。カウンセラーの言葉を借りると次のようになる。

＊大目に見るということ

＊どういうことを大目に見るのかーしかも いくつか

私はカウンセラーの指示を守っていなかったことに気付いた。大目に見るとはK君に完璧さを要求しないことであろう。しかし、たとえばK君が教室から出なくなったとする。すると次には担任の先生として、勉強に取り組まさなければならない、かばんや学習道具

の片づけをさせなければならない、給食当番・掃除にも取り組ませなければならないといったーーさせなければならないという命令や担任の先生として自分一人で頑張らなければいけないといった常に肩に力が入ったような状態でいる自分が、実は私自身を苦しめていたことにやっと気がつき始めたのである。そこで、私はクラスの子どもたちの力を借りてみようと思い、子どもたちにK君のことを私と一緒に考えてもらうことにした。

給食当番のことを例に取ってみると、次のようになる。今までは給食当番であっても逃げ回りなかなか取り組もうとしなかったK君であったが、私があることをクラスの給食当番の子どもたちに頼むことによりK君に給食当番の仕事をさせることができたのである。すなわち、エプロン姿の給食当番がK君の所に行き、「K、一緒に給食当番の仕事をしよう。おまえがおらんと人数が足らんからこまるんじゃ」と耳元で言うことである。K君は初めは照れくささもあり逃げまわっていたが、当番の子どもたちに「K君」と声をかけてもらうことにより当番の仕事に取り組むことができた。

K君のお母さんとの連絡帳のやりとりで、既述のように私はお母さんとの共感をしたいことを連絡帳でした。するとお母さんは連絡帳にハートマークを書き「私にも気をつかっていただきありがとうございました。大変うれしいです。」と一言添えられていた。したがって連絡帳には、お母さんが家でのK君の様子を書く。(但し、すみません、しかっておきました、申し訳ありません等の言葉は書かないでくださいと指示) そして私は返事と学校でほめられることを書く。さらに連絡帳を面倒くさがって書こうとしないK君には赤ペンで月日・曜日１２３４５といった校時、持ってくるもの、しゅくだいという所まで書いておくことにした。

(ある日の連絡帳より)

きのうも早くねました(夕食後すぐ) きょうは6時におきて宿題をしました。「近頃は給食当番をやっているよ」と自分で自分をほめていました。

私は、自分でK君が自分をほめられたなんてすごいですねと返事を書いた。

ある日の授業中の様子を見てみよう。生活科の学習で、1年生からゲーム大会に招待された時のことである。K君は機嫌良く関わることができ、1年生にとってよきお兄さんぶりを発揮し、生き物の話やゲームの話など喜々として参加していた。さらに、生活科の学習が終わってから直ぐの国語の時間には、楽しかった生活科のことを日記に2ページ近く書くことができた。日記を書きながら、「先生、ぼく何の遊びやったっけー。」私に話しかけてきた。何だか落ち着かないK君に対して、私はそばに行き、「K君、何月何日って書いて」と言う。素直に応じる。「きょうは、どこまでがんばれそう」とK君に聞く。そしてK君が言ったところに赤線を引く。そして、「先生はいなくてもできる？」と言うとK君は「うん」とうなずいた。しばらくしてK君は日記を提出した。私よりも子どもたちの方が驚き、「先生、Kが日記書いたよ」と言い、「やればできらーやあ」と子どもたちはK君に言った。K君は照れていた。しかし、クラスの友達に自分のことをほめてもらったためとてもうれしかったようである。また、休み時間になってK君は、「先生これあげる」と言ってゲーム大会での賞品のビーズを私にくれた。大切なものを私にくれたK君は何か感じるものがあったのだろう。私はうれしくなった。私は「ありがとう」と言うと共にK君の頭や顔をなでてやった。そして日記にはK君が日記を書いてくれてうれしかったということをK君に伝えるために、1ページにわたって朱書きした。

学期末の漢字テストでは、K君は問題数の多さから取り組もうとしなかったため、私は

次のようにしてK君に取り組ませてみた。K君を私のそばに来させる。そして1行ずつテストの紙を折ってあたかも1行で終わるかのようにして取り組ませてみた。「書けても書けなくてもいいから1行すんだら先生の所に持っておいで、またテストの紙を折ってあげるから」と言うとK君は最後まで頑張って取り組んだ。ところが、帰りじたくがとても遅い。K君は「帰りたくなーい、まだいたいよー」と言い、だだをこねる。そこで、私は手をつないで靴箱の所まで行った。K君は靴箱のところから保健室へ行き、3年生とけんかをしてしまった。腹を立てたK君は、自分のクラスの友達の上靴を床にばらまいた。翌日、あっさりと自分がやったと認めたK君に私は初めて素直に応じてもらったことで気が抜けてしまった。

3週間ぐらい、K君の調子のよい日が続いた。K君の調子は良いが、私は何故かわからないがとても疲れる日々だった。「K君の調子はいいが、K君の今日の調子はいいかな」という不安の中でのK君の落ち着いた状態の中に私はいた。さらに、K君が学習に取り組むことができるように、毎時間K君にアンテナを張っていたこと、うまく学習に取り組んでくれたことがうれしくなって楽しくって今度はどんなことをしてみようかなと考えたりしたこと、同じ母親として共感する部分がK君のお母さんにあって辛かったことなどから、私は、水がオーバーフローしそうな位疲れていて家に帰ってから涙を流すことも多かった。

カウンセリングで、私は自分の様子をカウンセラーに話した。「K君との接し方でうまくいったところは何故うまくいったか確認するように」とカウンセラーは指示された。さらに続けて、カウンセラーは「先生、自分をほめていますか」と言われ、最後には「頑張りすぎに注意ってところかな」と言われた。

2学期末を迎え、K君に今までの落ち着きが見られなくなってきた。以前のように何を言ってもどう言ってもK君に響かなくなってきたのである。感情的になりそうなところをぐっと押さえて、私はK君に接した。カウンセラーの指示もあって、K君と守れる約束を連絡帳でやりとりすること（これならできると私が判断したこと）K君の動きやすいことから立て直すことを考えることにした。そして、私は金ピカシール作戦へと出たのである。

1．先生が教室に来るまでにかばんをロッカーにかたづける。
2．1～4時間目をがんばる(外に遊びに出ない)
3．れんらくちょうを書く

私はK君が「よくがんばりました」と書かれてある金ピカシールが大好きであることをお母さんから聞いていたので、金ピカシールを3分割することにより、守れた約束事の部分だけはさみでシールを切って与えることにした。したがって、すべての項目が守られたならば、連絡帳を私に見せに来た時に、完全な形で金ピカシールをもらえるということになる。しかし、授業も2学期末の時期で「書く」という作業が多く、ともだちの作業の邪魔をしたり、教室の徘徊があったりで、学習の部分に当たるところのシールは半分だけということも多々あった。だがK君本人は、金ピカシールを「ぼくだけの特権シール」と思っていることから、先生に認めてもらえることで、positiveな自分と先生との関係を維持できるものであろうと後日カウンセラーに私は言われた。

2学期の後半から私自身に「何かが変わった」という感覚があり、K君との関係も少しずつ波長が合い出し、変わっていった。カウンセラーは、「いろいろなことがあってしんどい思いをしてビーズがバーンとばらまかれて今の状態を再編成できたんだね」と表現された。今までカウンセラーはいつも「先生しんどいのによく頑張っているね」と声をかけ

て下さっていた。でも私はピンと来ないことが多かった。だけど、カウンセラーのおかげで、私なりに学習することができて何かひとつでもK君に対してうまくいったことができたから、私は初めてカウンセラーのリップサービスではなく本当のことだったんだと自分でも納得することができた。

5．K君の観察記録（3学期）

いよいよ3学期となった。冬休み明けということもあって、K君はせっかくできていた行動パターンになかなかならず、相変わらずの気分による行動が目立った。だが、驚くべきことが起こった。なんと2年生になって初めて掃除に取り組んだのである。掃除場所は手洗い場と水回りである。冷たい水を使っての掃除だからきっと逃げていくだろうと思っていた。だからこそK君にさせてみたかった。ところが、3学期になって初めて3組の掃除場所となったこと、水遊び感覚でできることから新しい刺激に対して敏感なK君は反応してくれた。

給食当番の仕事には取り組もうとしなかったK君だが、「あしたはサボらないでやるんだよ」と言って抱いてやると、次の日にはきちんと取り組んでくれた。私はカウンセラーから「頑張りすぎに注意」という指示を守りながら自分でK君への接し方をコントロールしていくように心がけた。

K君のがんばりを連絡帳でお母さんに知らせたところ、以下のような返事が来た。

（このようなお話は心がなごみます。Tをほめたたえておきました）

クラスの女の子たちが私の机の周りに来て、「先生、K君はきょうからべんきょうがんばるっていいよったよ」と言うように、K君自身も自分の中に確実にやれるという「良い自分」というイメージを持つことができ始めたような気が私にはした。したがって、カウンセリングでも私は笑うことができたし、カウンセラーには私が書いたK君の観察記録から、「ひとつの山を越えたね」と言われるようになった。

人間というものは不思議なもので、私は「ひとつの山を越えたね」と言われると急に気が抜けてしまい、私は観察記録のペンが走らなくなった。「気が抜けてしまったというのは楽な感じがするのですが、自分がサボっているような気がしてならない」とカウンセラーに話したこともある。カウンセラーが「楽な感じとはいっても今まで苦労して泣かされてつかんだ日々だから安心して良い」と言われ私は、救われたような気がした。

日々気分で行動するK君に対しても、一直線に発達しなくても曲線を描きながら発達していくものだと頭の中で図をイメージしながら、私はK君と接していた。したがって、「K君は調子が悪いぞ」と思える日も、一生懸命私は自分に「K君は大丈夫」と言い聞かせていた。ところが、今までに私も見たことがないくらい、K君は荒れ、無気力に近い状態で、どう言っても響かない。私の方が疲れ果てる。K君は1日の中でも感情の揺れを激しく表す。私は、ある日の記録で次のように記している。

「今日これ以上相手になると、涙が出てきて私の心がパーンとなってしまいそう。キレました。」「さすがに私もキレます。でも、キレるだけではなく何故K君が荒れて修復不可能なのか、そして私も泣くだけではだめだ。進歩がない」と書いている。

（ある日のK君）

教科書もノートも出さない。国語の授業の時、国語の教科書を外側に内側は図工の教科書にして見ていた。たまたまK君の後ろの子どもが「おい、K、図工の本を見るな」と言っ

てくれて私は気付いた。給食中も食べ終わらないうちに歩き回る。私の指示をすべて無視する。K君の落ち着かない状態と私の忍耐の日々にクラスの子どもたちも何かを感じたのであろう。K君が図工の教科書を見ていた日、教室で違う子どもたちが帰る支度もせずに走り回り、オルガンを倒してしまった（けがはなし）誰一人注意をする子どももいなくて悲しくなった。優しい気持ちで下校させることができなかった。

私はカウンセラーに電話をした。すると、次のような指示が出された。

＊K君は、書くことが苦手なので落ち着かない

＊K君は簡単なことには取り組みたくない

以上のことをふまえて、他の子どもたちに向けている中の40分の１でもいいからK君に声かけをするようにしてください。

カウンセラーの指示は、私にとってとても厳しい指示であった。

（ある日のK君）

国語の授業中、「やりたくなーい」「いやーだー」と言って教室内を徘徊していて、とうとう私に国語の本を投げつけた。同じ日、K君は算数の時間も「やりたくなーい」と言って私に筆箱を投げた。筆箱は私の頬をかすった。クラスの子どもたちもびっくりしていた。そして、私を気遣ってくれた。

私は今まで頑張ってできていたことがすべて崩されて、自分をケアすることさえできなくなってきた。そこで、緊急に私は、またカウンセラーを頼ってしまった。指示は、「私としてではなく、先生としてしかり、私としてではなく、先生としてほめるように。」先生としてK君に返すようにとのことだった。私の辛さを知り、私に共感的理解をしながらも、私に指示をされるカウンセラーを厳しい先生だと思うと共に、私は突き放された気がした。「辛いのはわかるけれど、辛いのは私だけではなくK君もだから、先生として頑張らなければならないのではないかと私に教えようとされていたのか？」と、私はノートに書いた。同じ頃、私の恩師は、「カウンセラーと連絡が付かないときは、夜中でもいいからとにかく電話をしなさい」と陰で私を支えて下さった。涙が出そうなくらいにうれしかったことを私は記憶している。そして一年が終わる頃になって、やっと私は自分が一人ではなく、辛いときはまわりに私を支えてくれる人達がいて、「辛いときに辛いと言うことは悪いことではないのではないか」とわかり始めてきた。

仕切り直しの意味で、私は久しぶりに読み聞かせをした。K君はもちろんのこと、クラスの子どもたちは手をたたいて大喜びだった。

K君は、万引きをしたり、クラスの鉛筆削りの穴にセロテープをつけてみんなが使えないようにしたりということもやったが、６年生を送る会では呼びかけの第一声を受け持つことになって、気分をよくして過ごすことが多くなり、修了式の日には、私はK君のお母さんから連絡帳で手書きの花束をプレゼントされ、お母さんとうまく関係ができて終わることができ、１年間の苦労が吹き飛んでいったような気持ちになった。さらにK君とは、私がチャート図で考えたように、「大変手の掛かる子どもだったけれど、可愛かったな。もう１年ぐらいだったら受け持っても良いかな」と思える状態で長かった１年間が無事終わった。

６．おわりに

K君との１年間を振り返ってみると、考えていかなければならない問題点がいくつかあ

げられるだろう。第一に、「ティームティーチング」に的を絞って考えてみたい。

「ハーバード大学の学部長であったケッペル（Keppel、F）が1955年教員養成計画改善の一環として提案したのが始まりとされる。形態については、学級間の枠は固定しながらも、それら相互間で教師が一層の協力を計るという従来の教授組織に近いものから、学級の枠をはずして、複数の教師とその担当する生徒全体が１つの集団を構成して、授業の展開に応じて弾力的に、大、中、小の集団の編制を繰り返して行うというやり方に至るまで、多様である」(2) と言った具合に、主として学校の中で、それぞれの学校の教職員の中で授業が行われることであるように書かれていたり、教科の学習内容をいかにして効果的に教えていくかという手段の一つとして「ティームティーチング」が捉えられてしまうことが多い。しかし、本来の「ティームティーチング」は、学校の中の教職員で行われることではなく、地域の人々、いろいろな専門家の人々といった「シンクタンク」（Think Tank）を使って行われるはずのものだったのではないだろうか。したがって、オープンスクールを運営するに当たっても、組織面で、教師の中に、カウンセラーや学校栄養士の先生が、同列で存在し、ティームを組むということを、私は再確認したい。また、「ティームティーチング」を組織面だけでなく有機的に考えてみよう。「ティームティーチング」を有機的に考えていくと、「オープンマインド」（Open mind）が必要になってくる。

「オープンマインド」とは、閉鎖的かつ保守的な発想を取り去り、自分からそれぞれの持つ枠を外したりゆるめたりしていくことでオープンにした開発的・建設的な発想をいう。授業は教師だけが行うものではないし、子どもの生活も教師だけがすべて責任を持つものでもない。すなわち、保護者と一緒の授業運営であったり、内容によっては専門家の授業運営であったりすることもある。また、より最新の情報のための専門機関との連携も必要となってくるであろう。

既述の問題点として、「ティームティーチング」を組織化することをあげたが、私はさらに、今回Ｋ君と一緒に過ごして痛感したことがあった。第二の問題点としての、教師の精神面のケアの必要性である。すなわち、精神的な援助の「ティームティーチング」の大切さについて押さえておく。私は、Ｋ君と接していて、悩み苦しみながら、１年間を過ごした。同僚は、私の様子を見て、「元気にしているから苦しんでいるとは思わなかった」という人もいれば、「助けてほしいことがあったらいつでも言ってね。」と、優しい言葉をかけてくれる人たちもいた。でも、私は、「やってほしいこと」「助けてほしいこと」が、わからなかった。ただ、やってほしいことは、「精神的に滅入っているときに、守秘義務を持って、私の話を聞いてくれること」であった。実際に、カウンセラーは、私の話をよく聞いて下さった。しかも、ただ聞いてくれるだけで、肯定も否定もされなかった。私の恩師も同様に、私の話をよく聞いて下さった。両名の先生には、感謝の気持ちでいっぱいである。

同学年の先生に、私の話をよく聞いてくれる先生がいた。たとえ、人数は少なくても、手の掛かる子どもを受け持ち、受け持った子どもに自分の持っているエネルギーをかなり吸い取られると、精神的にかなり滅入ってしまったというのは正直なところ否定できない。しかし、「人に、否定も肯定もせず、とにかく話を聞いてもらう」という行為は、私にとっては何よりもパワーを充電できて、ありがたいものであった。すなわち、換言すると、「一人ひとりの先生が、自分の持ち味を生かしながら、前向きに考えていけるだけの、必要かつ十分な精神衛生」であると言えるのではなかろうか。したがって、オープンスクー

ルの「ティームティーチング」とは、「オープンマインド」を持ち、問題解決の援助のためのはたらきかけとなるような教師同士のコンサルテーションにほかならないのである。すなわち、「カウンセリングマインドとは、教師同士の場合であれば、その教師のベースになっている児童観・教育観・人間観を理解し、カウンセリングの基本関係・態度を大切にしながら触れ合うことである。」[3]が重要になってくるのである。また、子どもたちだけのカウンセラーではなく、教師自身に対するカウンセラーも必要不可欠な存在になってくると言えるのではないだろうか。

第三の問題点として、最後にK君との日々で私自身への反省点を述べてみたい。K君との1年間の毎日で、私の記録の中に流れているものは、「担任の先生として何とか頑張らなければならない」という肩に常に力の入った状態と、K君に対して「何々してはいけない」「何々しなさい」という威圧感を持って接している姿である。情けないことに、肩に力の入った状態でK君に接し、K君に命令しなければ自分が保てなくなってしまうと、当時の私は思っていたのだろう。対等の立場の学習仲間としてではなく、教師が生徒に命令することについて押さえておく。フレーベル（Friedrich Fröbel 1782-1852）は、人間が人間を命令することについて、次のように述べている。「命令的、干渉的教育は主として、ただ2つの場合だけなのです。明瞭な生き生きとした思想、事実と一致する自己証明できる理念である場合か、既に昔からあり、承認されてきた非難の余地のない場合です。（中略）しかし、かつて現れ是認された最も完全に非の打ち所のないものや、是認された最も完全な非難の余地のない生活は、唯一の非の打ちようのない本質、非の打ちようのない傾向を望むのであって、決して非の打ちようのないものに則った形式を望んだのではありません。もし、形式的な完全さが非の打ちようのないものよりも勝っていたならば、形式の上から非の打ちようのないものを望むのは、全ての精神的なもの、人間的に非の打ちようのないものへの最大の誤解になります。（中略）それゆえにイエスは、生活においても、教えにおいても、非の打ちようのないものを外面的に固持することに対して戦われたのです。精神的で、傾向的な、生き生きとした非の打ちようのないもののみが理想的に固持されるべきであり、見え方や形式などは自由に与えられてくるものなのです」[4]と記述している。人間が人間に命令する行為は、愛と信頼に関する領域に関わるわけである。したがって、フレーベルは、「干渉したり、命令できる場合は、神の意志が働いている時だけであり、歴史上の完全無欠な人物といえども成しえなかった。しかも、最高の人間とも言えるイエス自身が、命令したり、干渉したりする時に必要な基準、非の打ちようのない価値基準が固着することに対して戦っておられる。すなわち、人間には人間に命令したり干渉したりする権利は与えられていないと結論したのである。私達大人の社会は宗教戦争やアドルフ・ヒットラーの社会ダーウィニズムなどの人類の歴史の暗黒面に見られるように、誰かがあたかも自分が非の打ちようのない価値基準を持ったかのように錯覚し、価値基準を押しつけるために命令し、干渉し、ひいては戦争や虐殺を繰り返している。人類の歴史を紐解くまでもなく、私達は身近な教育の分野で、人間が人間に価値基準を押しつけてきたわけである。人間が人間を人間とも思わないで子どもの『自己活動』を考えることはできない。」[5]と力説した。しかしながら、私がK君に対してとった行動や態度は、人間である前に教師としての仮面をかぶり続けて命令したり、K君の行動の一つひとつを理解し受け入れる以前に、教師としての私の価値基準に合わないものとして管理・干渉したりしていたことが大部分を占めていたように思う。すなわち、自分を振り返ってみても、

常に教師としてK君に接し、しかも威圧的な態度で接し、命令することやK君の行動のすべてを教室の枠に縛り付けるかのごとく制限し、「みんなと同じように」することをK君に要求することが多かったように思うのである。私がとった態度は、学級担任として頑張っているように見え、あたかも学級を集団として保つということを名目にしているようだが、実はK君に対して私は苦痛を強いてきてしまったのではないだろうか。同様に私がK君にとった態度で基本的に失っていたことが、子ども観であるといえる。つまり、フレーベルが、「最初の微笑によって若き人間は直ちに他の各被造物から区別される。最初に微笑した時、自己形成の段階、自覚の段階を示し、人間になったことを示すものであり、最初の微笑は、人間の尊厳、人間の本質を示しているのです。(中略) 各自の一般的な表現によって、既に人格、人間の独自性 (個性) が表現されているにもかかわらず、子どものこの最初の表現は、微笑が一般に喜ばしくて好ましい印象を与え、子どもが人間になった印象を、さっ引いても人間になろうとしている印象を与えるのに、周囲の人々にそれほど意味のないものとして見過ごされている」[(6)] と記述しているように、子どもに人間としての人格を認めることが大切なのである。したがって、子どもを理解することができない大人は、たとえば、「L.D. (Learning Disability) だから大変だ」などのように区別してあたかも「問題がある子ども」として捉えがちであるが、「L.D.も子どもの個性であり、問題があるのではない」と考えることが少しでもできて子どもに接していくと、ずいぶんと担任の先生も子ども自身も気負いすることなく楽になるであろう。

今後は、「自分一人で頑張る」という忍耐力や辛抱の必要な狭義の「頑張り」から、みんなの力を借りることによる協力連携によって、私自身も肩に力が入らない自然な状態でいつも前向きにいられるよう努めていきたい。

(引用文献)

(1) 中島義明：心理学辞典：有斐閣：1999：pp.123. L.42-L.45

(2) 東　洋：学校教育辞典：教育出版：1988：pp.270.L.7-L.19

(3) 國分康孝：スクールカウンセリング事典：東京書籍　1997：pp.351.L.1-L. 5

(4) Friedrich Fröbel : *Die Menschenerziehung, die Erziehungs=, Unterrichts= und Lehrkunst, angestrebt in der allgemeinen deutschen Erziehungsanstalt zu Keilhau ; dargestellt von dem Stifter, Begründer und Vorsteher derselben, Friedrich Wilhelm August Fröbel. Erster Band. Bis zum begonnenen Knabenalter* : Allgemeinen Deutschen Erziehungsanstalt. Keilhau : Commission bey A. Wienbrack. Leipzig : 1826 S.15.Z.24-S.17.Z.7

(5) 三原典子・荘司泰弘：オープンスクールの研究 (第1報)：山口大学教育学部研究論叢：1998：pp.241.L.28-L.37

(6) Friedrich W. A. Fröbel : Das kleine Kind, oder die Bedeutsamkeit des allerersten Kindesthuns : In : *Die erziehenden Familien. Wochenblatt für Selbstbildung und die Bildung Anderern* : Nachlaβ Friedrich Fröbel 105 : Akademie der pädagogischen Wissenschaft der DDR : Der allgem. deutschen Erziehungsanstalt in Keilhau : 1826 : Sonnabend～6～den 11. Februar 1826 : S.84.Z.14-S.85.Z.15